

# 中世後期における京都周辺の関の構造

川島 優美子

## はじめに

中世において関は、交通と公権力との接点として重要な役割を担っていた。公権力が、交通に携わる人々や商人といった人々と、如何にして関わり或いは統制し又支配したのか、さらには交通路とは如何なるものとして中世の人々に認識されていたのか等を知る上で、関は大きな手がかりとなるものである。しかしながら、関の実態は十分には明らかにされてはいない。

中世の関についての研究は、相田二郎氏以来幾多の業績があるにもかかわらず、必ずしも豊富とは言いがたい。しかし、最近になって鍛代敏雄氏、桜井英治氏によって、関の本質に迫る意欲的な論考が発表され始めている<sup>(1)(2)</sup>。これらは、関は、単に交通上の障害であるという基本認識の上に立った従来の研究に対して疑問を發することによって、全く別の角度から関の持っていた機能や特性を見いだしている。関の研究は新たな転換点にきたと言えよう。また、関の研究は、従来個々の研究は優れたものであっても、それぞれの研究成

果がうまく関連し合っていないように見受けられる。例えば、関<sup>(1)</sup>間論争は、淀川の川関についての現象を、他の地域の陸関にまで一般化させている為に、論点が噛み合っていない。また、関の發生についても、交通諸機関の設備費用の徴収であったとする説と、山民・海民的な職能民の拠点における「初穂」「手向け」の徴収であったとする説の間には接点は見いだされていない。これらの原因は、関を一樣のものとして捉えようとするか、或いはその多様さを單線的な歴史的変遷の中で捉えようとしている為ではなからうか。その点を見なおすことも必要なのではないだろうか。つまり、関とは、交通路上の或る地点に於いてそこを通過する人や物品を留める場所、或いはその行為を指す極めて一般的な用語であって、その実態や性格は多様であったと考えるのが自然であろう。そこで、様々な関の様相をそれぞれ具体的に明らかにする作業が必要であると考える。

その為本稿は、対象を中世後期における京都周辺の関に限定することとする。中世後期の京都周辺の関をその対象としたのは、史料に恵まれているばかりでなく、室町幕府、朝廷、そして各種の座等

の関わりが、関において活発に展開されているという理由による。

これまでの京都周辺の関の研究は、主として次の三つの方向からなされてきた。第一は、率分関を中心に、公家や朝廷の官司家の家政経済を研究する立場から、率分関からの収入に言及したもの<sup>(8)</sup>。第二は、七口の関や率分関それ自体について、個々の位置の変遷や領有関係を包括的に研究したもの<sup>(9)</sup>。第三は、土一揆や惣村との関わりのなかで論じられたもので、荘郷民や足軽などが独自に関を設置したことを評価するもの<sup>(10)</sup>。以上にまとめられる。これらの研究は、個々の論文としては優れた成果をあげているものが多い。しかし、同じ京都周辺の関を扱っているにもかかわらず違った観点からの考察の為か相互に関連性が薄く、それぞれに異なった捉え方をされており、そのため関の具体的なイメージが結ばないのである。なぜこのようなことになったのであろうか。それは、関は様々な階層の人々や社会集団が関わっており、それぞれの利害関係や特性が組み合わされて成立している、という視点が欠けていたのではないだろうか。そこでそのような認識に立った研究が必要であると考え、その上で、広い視野に立った位置付けを行いたいと思う。

## 一 関の形態

関の権力構造や経営組織の検討に入る前に、関そのものの性格と深く関わる問題なので、関の形態について確認しておきたい。

近年「洛中洛外図」を素材とした京都の都市景観についての研究が盛んだが、その中に関について触れたものがある。その最初のものが、下坂守氏の「京都の復興——問丸・街道・率分——」<sup>(11)</sup>である。

その中で最も注目されるのは「京都の口の多くは、かなりの部分で周辺集落と——より具体的にはその村落の木戸と——重なってイメージされていた」<sup>(12)</sup>という指摘である。その根拠は、「洛中洛外図」中に見える七口のうちの粟田口村と鞍馬村は、集落を囲む柵と土塀と土堀や柵で囲まれ、その出入口に木戸が描かれていることをあげておられる。そして、押小路家を本所とする紺灰座が長坂口に存在した<sup>(13)</sup>こと、鞍馬口(良口)に商人集団が存在したこと<sup>(14)</sup>から、「加工原料を扱う問丸の特色は、その物資が京都に運び込まれる直前の地点に成立した点にあった」と述べられている。また、今谷明氏は、釘貫を中心にして関所について述べられている中で、関所の景観にも触れられている。「洛中洛外図(上杉本)」の粟田口・鞍馬口のいずれもが釘貫で囲まれ、その中に描かれている下級武士らしい姿の人物を「関所の役人(代官)」ではないか、と推測されており、しかも、彼らがどちらの場合も複数であることに着目されている。

ところで、釘貫について、今谷氏の研究の他に伊藤喜良氏の研究<sup>(15)</sup>が有るが、両氏の説をまとめると、「(1)禁裏の釘貫は、各門の外側に常設された構築物であり、内裏門役が管理・開閉していること、(2)有力な大名の被官人といえども自由通行を許されず、通行は全面的に朝廷側の権限に属していたこと、(3)当時『諸方』釘貫が設置されており、夕刻には閉鎖されていたこと」と「土一揆の防御の役割を果たした」<sup>(16)</sup>こと。そして、「疫神等を防ぐ呪術的な要素がきわめて強いもの」<sup>(17)</sup>であることが明らかになっている。

基本的には、下坂氏の言われるように、七口の関所は、主要街道

上に存在する何々口といわれる集落の出入口に設置されたものだったと考える。例えば、山科家に味噌公事を納めていた山中関衆や諸役免除の特権を得ていた竹田口・法性寺口の供御人も、まさにこのような集落に居住し、関務を執っていた人々であったと考えられる。関所において博奕を禁止していることを示す史料も、商工業者が集住し交易の行なわれていたであろうことを傍証する。とすれば、関所とは、交通路上の一点を仕切るように設置されるのではなく、一定の広がりを持つ場と考えるべきであろう。

寺院境内にも関所がおかれていたが、それについても同様の形態がみられる。伊藤穀氏によると、東寺や東福寺等の境内には商工業者が集住し、在家が形成され、塀や釘貫等の要害施設がそれを取り囲んでいた。<sup>(23)</sup> また、宮本雅明氏は、多くの事例をあげて、中世の多くの寺社境内には、「市庭」を基礎とした都市空間が展開していたことを証明されている。<sup>(24)</sup> 商工業者が集住し、釘貫や塀などで明確に周囲と区切られた空間である点で、何れも共通した特徴をもっている。

次に、関料徴収方法について検討したい。それを直接示す史料は見当たらないので、関料徴収の補助的手段である札狩を手がかりとする。

札狩の行われたことを示すのは、今のところ兵庫関の札狩を神崎関<sup>(25)</sup>で、淀の魚市の札狩を東寺境内と木幡路の役所<sup>(26)</sup>で、各々室町幕府がそれを許可した史料三点のみである。札狩については、「札とは税を納入したもの、または課税を免除されたものに渡される札と考えられるから、札狩とはそういう札を所持していない者から、追徴

税をとることであつた<sup>(28)</sup>」と理解できる。つまり、このように互に関同士で連携体制をとって、関料逃れを防止しようとしたことがわかる。だが、ここで問題としたいのは、札狩自体がその本関とは別に、改めて室町幕府から許可を受けているということである。しかも、神崎関の場合、本関(兵庫関)で関料徴収の対象となっていない船にまで煩を懸ければ「永被<sup>レ</sup>止<sup>二</sup>札狩<sup>一</sup>上、可<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>停<sup>二</sup>廢本関<sup>一</sup>也」と、非常に厳しい処罰を受けることが明記されている。つまり、或る関の関料徴収を他の場所で行うことは、厳しく制限されていた。

このことと、先程述べた関所の形態的特徴(釘貫や塀で囲まれていたこと)を考え合わせると、関料の徴収は、仕切られた関所内でのみ認められた行為であって、そこから出て行えないものであったということが一般通念となっていたのではないかと、ということが考えられる。逆に、関料徴収権を行使することのできる空間を、周囲から明確に区切ることでできる塀や釘貫を設けることは、それが集落であれ、寺院の境内であれ、また、それ専用の空間であれ、関所の成立するための不可欠の条件だったと言えよう。それはまた、通行者を容易に閉じこめる事のできる施設でもあった。従って、関所の内部は、その外側とは異なった秩序を保つ空間を形成していたと考えられる。

## 二 率分関の権力構造と経営組織

本節では、率分関設置手続きと代官請負に関する史料をもとに、率分関の構造を具体的に明らかにしたい。率分関設置に関する史料

には、率分関に関わる人々についての情報が、比較的详细に得られるのでそれを利用する。使用する主な史料は『建内記』、『教言卿記』、『山科家礼記』等とする。特に『建内記』では、嘉吉元年（一四四二）八月頃から率分関設置の為の本格的な活動が始まるが、その記事が最も詳細なのでそれを中心とする。他も必要に応じて参考にする。以下、関連する人々を順を追って検討する。

①管領 率分関設置許可を求める際に、先ず本所が働きかけるのは管領である。本所は管領に対し直接交渉の場を持ちながら、一方で幕府の奉行人を通じて証文類を提出し、最終的には管領奉書の形で設置許可を得る。<sup>(32)</sup>つまり、率分関の停廃や設置許可といった、最も根本的な部分を掌るのが、管領である。しかし、経営に際しては、具体的な役割は特に見られない。

②幕府奉行人 ①で述べたように『教言卿記』・『建内記』の段階では、本所と管領との間の取次や証文類の扱いなどで、率分関設置許可を与えるのに際して実務的な仕事は行っているが、代官や沙汰人との契約や交渉には関与していない。<sup>(33)</sup>

しかし、室町期から戦国期にかけて、幕府が率分関の経営に次第に関与していった事は、次の嘉吉二年の『建内記』の記事からも判る。

御厨子所雑分所率分制札事、古来只自是加下知而已、武家制札不<sub>レ</sub>及其儀也、近代諸関已下武家制札在<sub>レ</sub>之、無<sub>レ</sub>其儀者、不可<sub>レ</sub>叙用<sub>（飯尾為朝）</sub>歟、仍初而申請之由、示遣奉行肥前入道永祥（以下略）<sup>(34)</sup>

つまり、以前は、率分所の制札は本所が下知を加えるのみで、武

家は関与しなかったが、近頃は諸関以下、武家の制札が無ければ関として認められない。そこで、今回初めて申請するというのを、幕府奉行人飯尾為種に伝えたというものである。この史料は、具体的な形で、率分関の経営にとって幕府の權威が不可欠のものとして組み込まれていったことを、明確に物語っている。

ところで関の制札とは、その地において関料徴収を行うことが認可されていることを示すもので、関所に掲げられるものである。例えば、具体的には次のようなものである。

#### 定 内蔵寮領朽木口率分関条々

- 一、料足運賃貫別不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>参文<sub>一</sub>事
- 一、米穀運賃石別不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>参合<sub>一</sub>事付雜穀准<sub>レ</sub>之
- 一、荷駄不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>拾文<sub>一</sub>事
- 一、歩荷不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>五文<sub>一</sub>事
- 一、人別不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>過<sub>二</sub>武文<sub>一</sub>事

一、諸商売物任<sub>レ</sub>例可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>其沙汰<sub>一</sub>事

右条々堅被<sub>二</sub>定置<sub>一</sub>訖、以此等員数为<sub>二</sub>得分物<sub>一</sub>、都鄙往反旅人無<sub>二</sub>其煩<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>勘過<sub>二</sub>候<sub>一</sub>、若雖<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>一事<sub>一</sub>令<sub>二</sub>違反者<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>関務<sub>一</sub>者速可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>処<sub>一</sub>罪科<sub>二</sub>之由<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰下<sub>一</sub>也、仍下<sub>二</sub>知如<sub>レ</sub>件<sub>一</sub>

文明十一年十二月七日

左衛門尉三善朝臣判  
（飯尾為朝）  
（布施英基）  
下野守三善朝臣判<sup>(35)</sup>

更に、応仁の乱以降の『山科家礼記』段階になると、個々の率分関の安堵や違乱停止、代官・沙汰人クラスの者に対しては本所の要請に応じて、公用銭無沙汰を咎めたり、催促したりと、経営に関わる部分にも、幕府の奉行人が大きく関与している。<sup>(36)</sup>

以上のように、奉行人の役割を通して、室町幕府が率分関の経営に對し、どのような形で関わりを持つようになっていったかの推移を知ることができる。

③守護(侍所所司) 基本的には、幕府(管領又は奉行人)の奉書を承けて遵行する役割だが、それだけにとどまらず、独自に、より大きな権限を持っていたと考えられる。管領は、言わば率分役徴収の許可を与える権限を持つが、守護は、許可を受けた率分所をその土地に設置する許可を与える権限を持つ。換言すれば、守護の認可無くしては率分関の経営は成り立たない。更に、その率分関ではどのような運営方法(「取様」)をすることを認めるかの権限は守護が持つ。「取様」とは、率分役徴収の施行細則で、率分関経営の最も重要な事項である。「取様」の内容は又、守護の許可無く書き改めることはできない。但し、『山科家礼記』においては、管領が取様を掌る例もあり、その時々的情勢により、変化したものと思われる。つまり、事実上、領国内の率分関は、守護の管理下にあると言える。それは、現地でトラブルが発生した場合、それを調停したり、強制的に収束させることのできるのは、守護及びそれに繋がる在地の勢力である。その守護の力に憑み、利用することが、率分関の経営には不可欠だった。従って、仮に、その力を守護が持たなければ、他の勢力に頼る事になる。

④守護代(所司代) 守護代は、文字通り守護のもとで実務にあたる者であるが、率分関設置手続きのなかでは、本所の選定した代官の承認と、公人の現地への派遣を行う(公人の派遣については侍所公人の例のみ)。また、公人を派遣した後、率分関の稼働を開始で

きることを代官に直接に告げるのは所司代の役割である。(但し、公人の派遣は必ずしもその都度行われていたものではないようである。初めてその土地に率分所が立てられるときのみ、派遣されたのではないだろうか。)また、河内国においては、守護代が制札を現地において「打」つ(地面に打立てる)行為を行っている。つまり、率分関設置の現地における最終段階の確認・調整は守護代(所司代)の役割だった。

⑤侍所公人 率分所経営のための取様や代官の決定など、事務的な準備が終了した段階で、率分所設置予定地で(代官を伴う場合もみられるが)地下にそれを公布するのが侍所公人である。そこで地下人等の同意が得られなければ、本所は改めて率分所の設置を検討し直さなければならない。

⑥代官 率分関の現地での実際の運営は代官が請負い、毎月契約通りの請料を本所に支払う。従って、本来、率分所の経営自体は本所と代官のみで完結するものである。

新田英治氏は主に『建内記』をもとに、室町期の公家の所領経営における代官請負制の研究をしておられる。<sup>(47)</sup>それによると万里小路家の所領において代官に補せられた人々を大別すると、守護に繋がる在地の武士、寺僧や土倉のいずれかとなる。率分関の場合もほぼ同じ傾向にあると言える。<sup>(48)</sup>但し、山門膝下の北国口湖上(今堅田)率分所と北国口陸地率分関は山門使節が、また、八瀬口率分関は、京都北部の山林河川に特殊な占有権を有していた高野蓮養坊の弟月性院が、それぞれ代官職を請負っていた。<sup>(49)</sup>東海道口率分関は、陰陽寮頭賀茂在方が、率分所の在所が天智天皇の陵墓内なので、「可致」

「慇懃之沙汰」と言って代官職を所望している。<sup>(51)</sup>このように、率分関代官の場合は、莊園の場合とは若干異なり、率分所の設置された場所の特殊性がその人選に際して重要であった。

また、商人が代官を請負う例が少なくなかったことは、率分所の機能と関わる重要な特徴である。脇田晴子氏は、「京都の諸口関所周辺が、京都市中と外をつなぐ市のような役割を果たしたのではないかとも思われる」と述べておられるが、氏のこの推定は的確なものと考える。一部商人の利害が、率分関の利害と一致したことは、率分関を存在せしめた大きな要因であるが、それについては次節で詳しく検討することとする。

⑦警固役 警固役は決して全ての場合に置かれた訳ではない。一般的には警固役の役割は代官が持っているものだが、代官職を単なる得分として、在地勢力との繋がりを持たない者が得た場合には、別個に警固役を置く必要があった。摂津国住吉郡境北荘内に設置された御厨子所南口枝率分関は、惣得分を、本所〔万里小路家〕と、代官職を請負った、故細川持之の後室で当時摂津国守護細川勝元の母阿茶子女とが折半した。その為、実際の率分関経営の為に「在所警固」役として当所の領主の香西之長が補任された。<sup>(52)</sup>香西は、警固得分として本所・阿茶子女双方から各々の得分の五分の一、つまり惣得分の五分の一を得るという契約を結んでいる。役割は代官職とはほぼ同様で、在地において率分役徴収を順調に行うのに十分な勢力を持つものでなければならなかった。ちなみに、この事例の場合、守護の扶持をうける為に、惣得分の半分を得る権利を阿茶子女に譲らなければならなかった事<sup>(53)</sup>が、万里小路家の立場を象徴している。ま

た、このような事例は、関の代官職が物権化している状況を示している。

⑧上使 本所と代官の契約のなかで、代官が一定額を納めることで請負う場合と、率分収入の増減に応じてその割合で請負う場合とがあった。上使は、後者の場合、本所が関所に派遣して、代官に「ごまかしのないよう、監視する役である。史料にはっきりとした形で表れることは少ないが、後者のタイプの契約の場合は、恐らく、多くの関でこのような措置がなされたであろうと考える。『建内記』の西七条口率分所の代官請文には、上使についての細かい規定が見られる。<sup>(54)</sup>但し、応仁の乱後になると後者のタイプはみられなくなり、殆どが一定額で請負う形の契約になる。これも本所側と代官側の力関係を反映するものと考えられよう。

以上の検討をもとに、率分関の構造と特質をまとめる。

そもそも、率分関とは何なるものであろうか。脇田晴子氏は、主に南北朝以降の朝廷官衙の経済状態の推移について論じられている中で、こう述べておられる。「(前略)本来の供御人は、このときにはすべて有名無実となっていた。したがって、京都における売買交易の輩からの課役徴収が、内蔵寮の供御人支配の実態であった。これ以降においては、その傾向はさらにはげしくなつて、火鉢売商人に見られるように、本来、供御に要する食料品に課税した御厨子所、御服、金銀珠玉をつかさどる内蔵寮が、食料品はもちろん、火鉢、炭、竹、筵などにも課税して、支配下におくいたるのである。率分関も、かかる商人課税の一種であり、官衙が背後にもつ朝廷の公権を利用して、京都に入る諸商品物は細大もらさず、関という網

を張って課税するのである<sup>(56)</sup>。この意味付けは的確で、これに尽きると考へる。要するに、率分関は、根本的には、朝廷の公権によって認められたもので、経営の主体は、飽くまで山科・万里小路両官司家である。率分役を徴収するに当たっては、室町幕府の許可を得、関務を請負う代官の確保のみで十分なはずである。しかし、それだけでは実際上困難なので、武家側の権力(守護・守護代・在地領主等)や、時には地下人(次節で検討する)等と利害関係を一致させる方向で大きく妥協し合いながら、慎重且つ柔軟な姿勢をとっていたことがわかる<sup>(58)</sup>。反面、率分役を得る為に必要な(或いは有効な)勢力を、次々に結合させながら、一方でその都度本所は力を弱め、次第に自壊していった、とも言えよう。

本節では、率分関のみを対象としてきたが、京都周辺の関は、率分関ばかりではない。徳政一揆の原因となり、破却された、室町幕府による内裏修理料七口の関は、率分関とは些か性格を異にする。

この場合は関料も毎月千疋という史料もあり一般的な率分役とは桁違いである<sup>(61)</sup>。更に、関所設置にあたりその土地の領主にさえ許可を得ていない例さえ有る。このように、強引に設置されたものであったため、通行者がいかに強い抵抗感を抱いたかは、『大乘院寺社雜事記』に「上下甲乙人迷惑珍事関也<sup>(63)</sup>」と記されていることからわかる。従って、幕府の設置した関はどれも長続きしなかったようである。それに対し率分関は、土一揆を非常に警戒しており、その対策にこまごまとした神経を配っていた。例えば、米に対しても課税する許可を得ていても、地下の抵抗が大きい事を警戒して対象品目から除外したりした<sup>(64)</sup>。また、一旦定めた取極も、情勢を見て変更す

るという事も行っている<sup>(65)</sup>。実際、文明二二年(一四八〇)九月の大規模な徳政一揆の際には、『山科家礼記』で見えるかぎり、この後の記事に、家領の関が破られた様子は無く、代官から山科家への納入にも変わりはない<sup>(66)</sup>。

土一揆や室町幕府によって停廃される関は、常に「新関」であった。「新関」とは何か。ここで、それを明らかにする為には「七口」について検討する必要がある。下坂守氏は、京の七口と呼ばれたものは、名称こそ一〇を越えるが、主要な七つは数の上では固定していたのではないかと述べておられる<sup>(67)</sup>。これに対して、佐藤和広氏は、「特定の七出入口を指すのではなく、洛外と洛中を結ぶ不特定多数の出入口を意味する抽象表現」・「室町幕府が設置した七口関や諸史料に現われる七口新関は、習慣上の汎称であり、実際には何カ所の関所がどの口に設置されたかは定かではない」と、述べておられる<sup>(68)</sup>。私は、様々な名称で呼ばれていても、それらは基本的には七口の何れかに属するもので、あくまでも原則は、京の周辺に限れば、七口以外に関を設置してはならないということになっていたと考へる。なぜなら、室町幕府側が関の本所に対して、その関が七口の何れに属するものであるかを尋問する史料が有るように、単に抽象表現であったとするには、かなり具体的に七口の名称にこだわりのルーツや七方向からのものが在る、と意識されていた。従って、率分関も、その七口に設置することが本来朝廷より認められた在り方であって、建前上は、何れかの七口の関でなければならなかった。しかし、通路そのものも周辺集落との関係も、時代によって

変化し複雑化したりすることによって、各口の関所の位置もそれに対応して移動したり増設したりする必要があったろう。また、内蔵寮、御厨子所さらには室町幕府といった複数の本所がそれぞれに関を設置した事もあって、名称や設置場所は多様化した。それでも、それらはやはり「七口の関」でなければならなかったのである。

これらの新設された関は「本関」に対して「枝関」と称された。本所が自ら「新関」を称する事はない。つまり、「七口」に本来設置が認められた関が「本関」、それを補うのが「枝関」、更に、その由緒を欠き、経営内容に於いても従来の本・枝関係から外れていると見做された新設の関が、「新関」と呼ばれた、と分類できよう。単に「新関」とは、時期的に新しく設置されたというばかりではない。

ともかく、官司家による率分関にせよ、室町幕府による内裏修造料関にせよ、朝廷および幕府という公権力を背景にした者の経営によって、京都へ入る交通路上に設けられた関であった点で、また、設置者側にとっては単なる収入源であり、名目は異なつても、京都に入る商品物に課税する、というだけにすぎなかった点で、両者は共通している。しかし、率分関は、本所の権力の弱さにより、幕府権力に頼り、在地の勢力と妥協し、また、被徴収者による抵抗を気遣いながらの経営であったことが、幕府の関と大きく異なる。そして、むしろその事が、率分関が、細々とながらもその一部が、戦国末期まで命脈を保つことになった要因のひとつであったと言うことができる。

### 三 関沙汰人の存在形態

前節では、率分関の権力構造と経営組織について検討した。それは言わば、上から編成されたものである。そこで本節では、関の全体像をとらえる為に、実際に率分関において関料徴収業務に携わった側、率分関の構造を下から請負った側の検討をすることとする。

第一節では、京都周辺の関の多くは、堀や釘貫で囲まれた、商業者の集住する交易の場であったことを述べた。つまり、実際に関務を行った関沙汰人は、商工業者、或いは運送業者であった可能性が高い。『建内記』に、万里小路家が出雲路口(良口・鞍馬口)に同じに率分所を立てようとした時、鞍馬口商人が、良口率分免除を強く訴えるという記事が有る。嘉吉元年(一四四二)に御厨子所率分関の設置許可が幕府より下りたのを承けて、十一月二十七日、鞍馬口率分所(小原口分と併せて一ヶ所)を立てるために、侍所の公人と代官が出雲路辺りの地下人に触れてまわった。その三日後、同月三〇日、鞍馬口商人と法師が、良口率分の免除を申請にやってきた。始めはその申請を拒んでいた万里小路時房も、御厨子所率分関の勅許は永和年中(一三七五)であるのに対して鞍馬口商人の課役免除の証文はそれより古く文和年中(一三五二)であったこと、万里小路家は数代にわたって鞍馬寺には帰依していること、彼らが嗽訴に及べば却って事の煩いになること、この三点により、出雲路口率分の免除を彼らに与えた。<sup>(73)</sup>

鞍馬口商人が関沙汰人であったという確証は無いが、少なくとも彼らは、鞍馬口に居住し、諸商売を行っていた。恐らく、鞍馬口の



集落内において、率分免除の特権を持たない商人から、鞍馬口商人に商売物が売り渡され、集落の出口において、それらは率分役を支払うことなく通過したのであろう。つまり、この地に率分所が設置されるということは、率分役免除特権を得た彼らに大きな利益をもたらす事になる。それと同時に、万里小路家にとっては、彼らに率分役免除特権を与えることは、大きな減収につながる。但し、そこで鞍馬口商人が考へての計画的な率分役免除の申請であつたとは、『建内記』の記事からは読み取れない。つまり、この嘉吉年中の段階では、まだ率分関によって、営業上の利権が得られることを、商人側がどれ程意識していたかは疑問であつて、むしろ、単純に、関による不利益を恐れての免除申請であつたと考えられる。またこの場合、関の設置場所も「洛中洛外図」のように、鞍馬口の集落を利用したわけではない。出雲路辺りに、その為の施設を立てたと解釈できる。つまり、この段階では、率分所の関料徴収場所の直前の地点が交易の場となるという形態が、はっきりと固定したものとはなっていない。たぐまずして、率分関を安定して経営したいという万里小路家側の利害と、特権を得ることによって利益の得られる商人側の利害が、ここに一致した事情が読み取れる。

『建内記』よりも多少時代の下つた『山科家礼記』になると、七口の商人と言へるような人々が頻繁に現われる。例えば、「辰巳口のもの」<sup>(74)</sup>、「法性寺・竹田口」の供御人、「しるたに口あき人」<sup>(75)</sup>、「山中関衆」と呼ばれる人々等である。彼らの活発な交易活動は、七口関の機能と連動して営業上の特権を得て、それが一つのシステムとして確立し、彼らの立場をより安定したものとすることを窺わせる。

これらの事情を、より詳細に知ることのできるのが、主殿寮領小野山供御人と長坂口兵士関との関係である。

主殿寮領小野山供御人については、奥野高広氏の研究以外、あまり研究されていない。しかし、『壬生家文書』<sup>(76)</sup>の中には、彼らについて興味深い史料が多く残されている。ここでは、関との係わりに絞って詳しく検討したい。

まず、小野山供御人の小野郷一帯の交通路に対する役割について検討したい。小野山供御人が、少なくとも南北朝期には、丹波から京都に入る長坂口において兵仕役の沙汰をしていたことは、文和四年（一二三三）の後光厳天皇綸旨案によって判る。この兵士は、權益を伴うものであったことが、隣接する細河住人が長坂口兵士をしきりに競望したことから窺える。それと同時に、多分に軍事的役割を担うものでもあった。例えば、明德の乱に際して、長坂越警固が幕府より小野庄沙汰人等中充てに命じられてゐる<sup>(82)</sup>。ところでこの兵士だが、相田二郎氏は、「人夫」の中で特に治警という任が加わったもので、普通の「人夫」以上の賃金を支払わなくてはならなかったところから、「兵士米」には関料と同じ意味が生じてきた、と述べておられる<sup>(83)</sup>。長坂口の場合には、人夫を務めたという史料は今のところ見当らない。むしろ、必ずしも人夫を務めなくとも、小野山の長坂越<sup>(84)</sup>一帯の交通上の安全を保障する役割に対して「兵士」役の徴収権を与えられていたと考えられる。これを仮に警固権と呼ぶことにする。

長坂口に内蔵寮の関が設置されたことは、奥野氏によると鎌倉末期には既に確認することができる。その後内蔵寮領以外に、御厨子

所率分所、小野山長坂口兵士米関、「勝仁親王関」<sup>(86)</sup>も設置された。

これらは、一つの固定した長坂口関所において領有者が交替していったのではない。どれも長坂口に立てられた関だが、少なくとも、主殿寮領小野山供御人の長坂口兵士米関と御厨子所率分長坂口は、同時期の史料が在り、また、内蔵寮率分長坂口も、主殿寮領のものとは同時期の史料を残している。<sup>(87)</sup>これによって、同時に複数の本所が、長坂口に関を設置していたことが判る。しかし、何れに対しても主殿寮領小野山供御人が実質的に関務を執っていたことが判る。例えば、大覚寺門跡境内嵯峨西口本関・枝関を小野庄内杉坂に移転する際、室町幕府は、主殿頭に小野庄にその旨下知すべき事を、小野庄供御人充てに関の警固を、各々命じている。<sup>(88)</sup>御厨子所率分長坂口関の代官は、主殿大夫家方という人物でこの場合関沙汰人はやはり小野山供御人であろう。内蔵寮率分関も長坂口関の小野への移転に際して、小野山公文所にこれを命じている。しかし、これは主殿大夫に断られて実現しなかった。<sup>(90)</sup>つまり、小野山供御人は、長坂口関において複数の本所から関務を請負っていた。換言すれば小野山供御人以外の者はこの一帯では関務を執ることができなかった。

ここで一つの事件を通して、彼らの生業と関の機能との関係を考察したいと思う。この事件は、永正一五年(五一八)の上小野と下小野との相論である。この事件の内容を簡単に述べると、下小野の役所(関所)が上小野内に枝関を立てたが、それは既に停廃されている。供御人というものは往古より諸商売諸役・諸関銭は、免除されていることを、下小野供御人が知らないはずは無い。それにも拘らず、今度は杉坂に役所を立てて、上小野の供御人を始め人馬に関銭

を懸けた。と、上小野供御人が訴えた。<sup>(91)</sup>それに対して、下小野供御人は、兵士役の沙汰を元々自分たちは行ってきた。上小野供御人に関銭を懸けたのは、上小野供御人自身の商売物ではなく、他所から買い付けてきた荷物や、上小野供御人以外の荷主の荷物を、自分たちの諸課役諸関銭免除の特権を利用して、運送しているからである。どんな荷物でも彼ら自身の商売物であれば、関銭は懸けないと、反論する。<sup>(92)</sup>結局判決は、下小野側に、杉坂の枝関を停廃するよう命じている。<sup>(93)</sup>この相論の史料から、彼らの活動形態を知ることができる。

一、<sup>(小野山七村)</sup>七村之商売、有<sup>二</sup>其限<sup>一</sup>歟之由申歟、勿論有<sup>レ</sup>之也、炭木・材木・樹果等、是<sup>二</sup>小野山諸商売也、<sup>(但上小野)</sup>○五村供御人等不<sup>レ</sup>致<sup>二</sup>此等商売<sup>一</sup>哉、如何、又、於<sup>二</sup>灰者、丹州野々村之商売也、然於供御人等其座於買得仕之間、雖<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>他所之商売<sup>一</sup>、就<sup>二</sup>自分之儀<sup>一</sup>関<sup>レ</sup>之訖、是則課役御免之旨也、縱<sup>レ</sup>雖<sup>二</sup>為<sup>二</sup>絹・綿花・紫等<sup>一</sup>、為<sup>二</sup>自分之商売<sup>一</sup>者、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>給<sup>二</sup>之、自余御料所以同前也、既有<sup>二</sup>荷主<sup>一</sup>於<sup>二</sup>駄賃<sup>一</sup>者、從<sup>二</sup>先規<sup>一</sup>給之間、後日<sup>二</sup>モ可<sup>レ</sup>給<sup>二</sup>也、然処彼申狀分者、<sup>(荷物)</sup>関役御免許之上者、何様請<sup>二</sup>取<sup>一</sup>○運送仕候共、進退之儀云々、<sup>(中略)</sup>

一、京都・田舎之商人、役銭与駄賃並渡之儀、無<sup>レ</sup>隠之处、役銭別<sup>二</sup>不<sup>二</sup>請取<sup>一</sup>之由申歟、一段之虚妄、言語道断之儀也、<sup>(中略)</sup>凡從<sup>二</sup>若州小浜等<sup>一</sup>高荷請取之時、役銭与駄賃以<sup>二</sup>八十疋<sup>一</sup>渡<sup>レ</sup>之也、其間<sup>二</sup>役所、当所迄七八カ所有<sup>一</sup>之、但依<sup>二</sup>在所員數<sup>一</sup>不<sup>二</sup>相定<sup>一</sup>也、号<sup>二</sup>至極課役免除<sup>一</sup>、至<sup>二</sup>駄賃者<sup>一</sup>、諸関悉出<sup>二</sup>之也、若関銭不<sup>二</sup>請取<sup>一</sup>者、何以致<sup>二</sup>沙汰<sup>一</sup>哉、<sup>(以下略)</sup><sup>(94)</sup>

これは、下小野側の申状の一部である。小野山供御人は、前述した小野郷一帯の警固権と、それに基づく関の沙汰権、更に発展して諸関・諸商売課役免除の特権を得ていた。本来は、炭木・材木・樹果を商売していたが、上小野供御人は、その特権を利用して、ここを通過する商人から商品の輸送を請負った。その際、駄賃に加えて「役銭」なるものを、輸送区間中支払う関銭より多少安くして上乗せしていたと考えられる。その活動は若狭国小浜にまで及び、更には、丹州野々村の灰座を買得するに至っている。また、長坂口には著名な紺灰座が存在したが、それと野々村の灰座を買得した小野山供御人の活動は無関係ではなからう。長坂口の紺灰座が関と関連した商業活動を行っていた事は、詳細は不明ながら間違いないと思われる。これに対し、下小野供御人は、あくまでも供御人自身の商売物のみが諸課役免除の対象であると主張し、このような活動は関料収入の減少を来すので、新たに枝関を立てて、高荷に関銭を懸けることで対抗した。しかし、この相論で上小野側が勝訴した事からも分かる通り、内容的にも地理的にも広範囲に活動を展開した、上小野供御人の勢力には抗えなかった。

この史料から、もう一つ分かることは、小浜から小野までの七八カ所の関では、「至極課役免除」と号しながらも諸関において悉く「駄賃」を支払っていることである。小野山以外の場所の関に対しては、形式的には課役免除であっても、なんらかの名目で一応は関料を支払っている事実は、関の持つ一特性としての保障体制の存在を物語るものであると考えられる。

ともかく、ここに見られる供御人の活動は、自らの関料徴収権を

梃子に、交易活動を大きく発展させている。彼らは独自に関所を立てるなど、関の本所側からは相対的に独立した関の経営を行っている。長坂口関を例にこれらを述べたが、室町中期以降、特に応仁の乱以降は、他の「口」の商人もおそらく関を梃子とした経済活動を行っていたと考えられる。本所側にとっては単なる収入源でしかない率分関も、関沙汰人と被徴収者達の世界では、それとは全く異なった次元で展開を遂げ、独自の機能を形成していたのである。

### おわりに

以上、中世後期の京都周辺の関について、いくつかの観点から述べてきた。なぜ、中世後期においては各地の荘園が有名無実になっていった中で、率分関だけが細々とながらも公家の家政経済を支えたか、ということを見ると、率分関が、単に関税として一方的な収奪であったとは、考えにくい。そこで、関の経営の中で各階層の人々が、どのようにして関と係わり、自らの経済活動の中に組み入れていったかを中心にして、検討を加えてみた。そこには、関を一つの収入源として、安定した経営の為に物権化した代官職(97)を譲渡している本所側に対して、関を一つの足掛かりとして自らの経済活動を有利に展開しようとする沙汰人側等、各々に全く異なる対応がみられた。それは、各階層の人々が、様々な状況にしたたかに且つ柔軟に対応してきた事も示している。

最後に、本稿では触れることができなかったが、関の存在を支えた背景に、呪術的側面があったことを指摘しておきたい。釘貫が「疫神等を防ぐ呪術的要素がきわめて強いもの」であったという、

今谷明・伊藤喜良両氏の説<sup>(98)</sup>を先に紹介したが、中原俊章氏は検非違使と清目の関係を述べられる中で、関の目的の一つである警固も呪術的な性格を備えていたとされている。<sup>(99)</sup>長坂口では、専ら小野山供御人が関沙汰人であったことも、このような側面と考え合わせる必要がある。『建内記』には、率分関ではないが、兵庫関で関役を沙汰しなかった船が沈没したことに対して、「神慮似て恐」と万里小路時房は書き残している。<sup>(100)</sup>これは、筆者が率分関の本所であるという点は考慮しなければならないが、やはり関料を支払う側にとっても、関料は単に税として収奪されるという意識ばかりではなく、行路の安全を願うといった呪術的側面もあったことを物語っている。

本稿は、対象を中世後期の京都周辺の関に限って、それを多面的な存在として把握することを目的とした為に、周辺地域との関わりや、歴史の変遷についての考察はしなかった。更により広い関係を検討することによって、交通路の支配をめぐる公武の関係も、明らかにすることができよう。今後の課題としたい。

## 註

(1) 本稿では、「関所」という用語は、単に関の施設或いはその置かれた場所を示すものとし、組織や仕組み、支配機構の総体としての関を指す場合は、「関」を使用するものとする。

(2) 相田二郎『中世の関所』(一九四三年 畝傍書房。鍛代敏雄氏は、『戦国末期本願寺の交通対策』(『日本史研究』二九四号、一九八七年二月)、『戦国時代の関所についての一試論』(『日本歴史』五〇七号、一九九〇年八月)の両論文において、関の一特性としての保証体制の存在を具体的に明らかにされた。また、近世交通体系への移行期において、関は解体、廃

止されたという通説に対して、関の持つ保証体制の部分が問屋制度や廻船組織に受け継がれ、その独占形態を統一権力側が再編成したという過程をとったことを推定されている。また、桜井英治氏は、「中世商人の近世化と都市」(『日本都市史入門』Ⅲ 人)所収 一九九〇年三月 東京大学出版会)において、十六世紀から十七世紀にかけて、関に対する支配も含めた、一定地域における交通等を支配していた中世の商人集団が、大名からその地位を追退されることによって、近世の御用商人となってゆく過程を明らかにされている。

(3) 清水三男氏の説(『中世の村落』一九三三年一〇月 日本評論社)を受けて阿部猛氏が更に具体的に展開された(『中世水路関に関する一考察―問丸との関係―』『日本歴史』一三五号 一九五九年九月)関り問説に対して、脇田晴子氏は、山科惣中の新聞を例示して、それは一部の関が結果としてそのようになったのであって、それが関の本質では無いことを指摘しておられる(『中世の交通・運輸』講座 日本技術の社会史 八 交通・運輸)所収 一九八五年六月 日本評論社)。そもそも、淀川の川関と惣村による陸上の関は性格が異なり、同質のものとして扱うべきではないと考える。脇田氏の上記の論文は、多様な中世の交通を時代の流れに沿って論理的に関連付け分析された貴重なもので、極めて示唆に富むものである。

(4) 脇田氏前掲註(3)論文。  
(5) 網野善彦「中世の負担体系―上分について―」(『三浦古文化』四一 一九八七年六月)他。

(6) 脇田氏は前掲註(3)論文において「新関の濫設は、交通に大きな障害をもたらした。が、そもそも、関所は、交通の困難を除去するための設備費用を徴収したものが、経済的利益に転化してしまったものであった。」(一一七頁―一八頁)と述べておられる。

(7) 桜井英治氏は、「関」の動詞形としての「セク」・「フセグ」という用語を紹介されている(『日本中世商業における慣習と秩序』(『人民の歴史学』九四号 一九八七年二月)。また「関」は、「堰」と同語源である。

従って、関とは、その本質や内容を表す用語ではなく、現象を示す用語であると考えるべきであろう。

(8) 中村直勝「室町時代の皇室御領」「室町時代の研究」所収 一九二四年一月 星野書店、奥野高広「皇室御経済史の研究」(一九四二年三月 敵傍書房)他。

(9) 相田二郎「京都七口の関所」(『歴史地理』第五七巻第五・六号 一九三二年一月・二月、後に同「中世の関所」所収、佐藤和広「中世関所に関する一考察―内蔵寮率分関を中心として―」(駒沢大学「史学論集」一八号 一九八八年二月)、同「淀川沿岸の内蔵寮率分関」(駒沢史学「三九・四〇合併号 一九八八年九月」。

(10) 田端泰子「中世村落の構造と領主制」(一九八六年一月 法政大学出版社第五章「戦国期の山科家と山科七郷」、志賀節子「山科七郷と徳政一揆」(『日本史研究』一九六号 一九七八年二月)他。

(11) 下坂守「京都の復興―間丸・街道・率分―」(『近世風俗図譜第三巻 洛中洛外』所収 一九八三年四月 小学館)

(12) 同右一三二頁。

(13) 同右一三〇頁。

(14) 今谷明「京都・一五四七年」(一九八八年三月 平凡社)第三部、天文期の生活文化 IV、関所と釘貫―京の七口の周辺

(15) 今谷明「門前検断と釘貫―権門の町屋支配」(季刊論叢日本文化2「戦国期の室町幕府」所収 一九七五年九月 角川書店)

(16) 伊藤喜良「四角四堺祭の場に生きた人々」(『歴史』六六ノ一 一九八六年九月二、釘貫と検断

(17) 同右三頁 尚、この部分の記述は、今谷氏前掲註(15)論文の説を継承している。

(18) 同右二四頁。

(19) 『山科家礼記』文明四年(一四七二)八月二五日・同年九月四日・同年一〇月一九日各条他。

(20) 『同右』文明一八年(一四八六)七月六日条。

(21) 『山科家礼記』文明九年(一四七七)十一月八日条 長坂口関代官請文案

(22) 例えば、康暦元年(一三七九)に、東寺の関係者が南大門前の関衆と交わって旅人に狼藉に及ぶという事件があった(『東寺百合文書』ぬ函 同年五月二七日付鐘突教善請文。文明一五年(一四八三)には東寺の境内で往來の旅人に課税をかけて、その度毎に喧嘩をするので、室町幕府がそれを禁止している(同)ニ函 同年七月八日付室町幕府奉行人奉書、「同」「廿一口方重書案」同日付室町幕府奉行人奉書案。これらは共に京都府立総合資料館歴史資料課編「第五回東寺百合文書展 中世の運送と交通」にも紹介されている。

この他「井関家文書」には、大覚寺境内にも嵯峨西口(大覚寺文書上巻)所収へ(一九八〇年九月 大覚寺)文明七年(一四七五)二月二四日付室町幕府奉行人奉書や、西口三神関所(同)所収 文明一六年(一四八四)四月八日付大勝院隆賢奉書が設置されたことを示す史料が在る。

(23) 伊藤毅「中世都市と寺院」(『日本都市史入門 I 空間』所収 一九八九年一月 東京大学出版会)

(24) 宮本雅明「空間志向の都市史」(『日本都市史入門 I 空間』所収 一九八九年一月 東京大学出版会)

(25) 『春日大社文書』嘉慶元年(一三八七)八月晦日付室町幕府奉行人奉書

(26) 『東寺百合文書』ニ函 文明一二年(一四七九)五月一九日付室町幕府奉行人奉書

(27) 『東寺旧蔵東京大学史料編纂所蔵文書』明応三年(一四九四)十一月二日付室町幕府奉行人奉書(『宇治市史2 中世の歴史と景観』所収 一九七四年四月 宇治市役所)

(28) 『宇治市史2 中世の歴史と景観』第三章、第四節 茶業と商品流通の発展、札狩と宇治の市 木幡役所と関銭 四四八頁～四四九頁、熊倉功夫・脇田晴子氏執筆分。

(29) この日、山科家の内蔵寮率分所が、山科家からの申請により、室町幕府から御教書を発給されて、元の如く復旧したという情報が万里小路時房の耳に入った。というのは、將軍足利義持の時に新聞と共に率分所が停廃されていた『建内記』嘉吉三年三月二十四日条。そこで「御厨子所率分事、予可出申状也、是又嚴重之公領、朝恩之家領也、」(同)嘉吉元年八月十七日条ということになった。

(30) 『建内記』嘉吉元年(一四四二)八月三日条、同年一月二十七日条他。

(31) 『同右』嘉吉元年八月二十七日条、同年一月八日条他。『山科家礼記』

応永二年(一四〇五)六月一日条他。

(32) 『建内記』嘉吉元年一月二二日・二四日条、『山科家礼記』応永二年六月十七日条他。但し、前者の場合、將軍の不在時にあたるが、管領下知状形式であったのか否かは明らかにし得ない。

(33) 『教言卿記』応永二年(一四〇六)八月七日条に園城寺が四宮川原率分所の沙汰人職について幕府に訴えた際、教言は、「凡如然率分所沙汰人職事、為公方非御沙汰之限」と述べている。しかし、同時にこれは教言の認識に関わらず、沙汰人職についてのトラブルにも幕府が関与し始めた事を表している。

(34) 『建内記』嘉吉三年(一四四二)四月二十八日条。なお「奉行肥前入道永祥(飯尾為種)は、率分所に関しては幕府方において実権を握っているとみられる(『建内記』嘉吉元年一月八日・二四日条他)。また、『山科家礼記』を見ると、専らその子為數・之種が、幕府側で対処にあたっている。彼らは、関に關係した何らかの特殊な権限を持つ立場に在ったと考えられる。

(35) 『山科家礼記』文明二年(一四八〇)正月二十六日条。

(36) 『山科家礼記』延徳三年(一四九一)八月一日条、『同』四年二月二三日条他、この例は少なくない。

(37) 『建内記』嘉吉三年(一四四三)六月一日条の御厨子所率分南口枝関の代官補任状案に、「(前略)若又守護無扶持、又此在所にて不事行(後

略)とある。

(38) 『建内記』嘉吉三年七月八日条に、「本所事雖御契約事候、於取樣等事、為守護一致沙汰事候」とある。

(39) 『同右』嘉吉元年(一四四一)二月二十四日条の万里小路時房の管領細川持之宛て書状案に、持之を通じて侍所所司京極持清に制札のことを依頼している。『同』嘉吉三年一月二六日・同月二四日・三月八日・同月一日条では、近江国内の東国口率分の取樣について、先に定めたものが「物咎」なので、つまり地下の抵抗が大きいので、それによるトラブルを恐れて、書き改めようとした際に、守護六角持綱の許可を求めている。また同年五月一日日条では、持綱が草津率分所の制札に文章を加えるよう指示している。

(40) 『山科家礼記』文明二年(一四七九)正月二六日条。

(41) 『建内記』文安四年(一四四七)二月四日条他。

(42) 『同右』嘉吉三年(一四四三)三月一日・一八日・二三日・二四日条。

(43) 『教言卿記』応永一四年(一四〇七)八月二日、九月二日・同月一日条。

(44) 『建内記』嘉吉元年(一四四一)一月二七日条。公布方法は「於出雲路辺代官相共触」れる、とあるので、野外において口頭で地下人等に伝達したものであろう。

(45) 『同右』嘉吉三年(一四四三)三月二四日条。

(46) 『同右』嘉吉元年(一四四一)一月二九日条。今路道下口率分所は、北白川に設置予定だったが、地下人がそのための土地を貸与することを拒否した。この地は山門の影響下にあり、坂本商人も関与していた為と万里小路家側は判断している(同日条)。

(47) 新田英治「室町時代の公家領における代官請負に関する一考察」(『日本社会経済史研究(中世編)』所収 一九六七年 吉川弘文館)

(48) 守護に繋がる在地の武士が率分所の代官職を請負った例としては、六角氏被官の平井式部丞の六角氏領国内の近江国草津の御厨子所東国口率分

所があげられる『建内記』嘉吉三年（一四四三）七月一日条。これを契機にか、平井は万里小路家と密接な繋がりを持つようになり、南口枝率分・北口率分等の設置手続きにも関わり、時房の率分所経営の相談役の様な活躍をするようになる。

(49) 湖上（今堅田）率分所は杉生坊蓮能（『建内記』文安四年（一四四七）九月一日条）、陸地率分所は十地坊景景が『同』同年六月八日条、それぞれ請負っている。

(50) 高野蓮養坊については、註（9）所引の佐藤和広氏の論文において詳しく紹介されている。

(51) 『建内記』嘉吉元年（一四四一）二月四日条。

(52) 脇田晴子『日本中世商業発達史の研究』（一九六九年三月 御茶の水書房第五章、第四節 都市問屋の農村商工業支配 四〇三頁）

(53) 『建内記』嘉吉三年（一四四三）五月十日・六月一日条。

(54) 『同右』嘉吉三年六月一日条。

(55) 『同右』嘉吉三年三月二日条所収禪澄請文案、文安四年二月二日条所収代官（与四郎）補任状・与四郎請文。

(56) 脇田晴子『日本中世商業発達史の研究』第四章、第二節 荘園領主経済の動揺 三三頁・三四頁。

(57) 『建内記』嘉吉元年（一四四一）八月一日条に「嚴重之公領、朝恩之家領也」と見え、また、同年十月記の紙背文書に時房申請の御教書草案が残されているが、そこに「為嚴重之地之上、勅裁・御判・度々御教書分明也」とある。

(58) 田端泰子氏は「戦国期の山科家と山科七郷」において室町幕府による率分関の撤廃・復活政策について、幕府の意図は、「その所有者から関銭徴収権を奪い、幕府がそれを掌握しようとする点にあった。（中略）幕府の国人層に対する組織策・懐柔策として関銭徴収権が付与された」と述べておられる。結果的にはそのようにも言えようが、幕府がそれを意図していたとは考えにくい。なぜなら、率分関の復活は、あくまで本所側の強い要

請によるものであり、個人的な例は多少あっても、幕府が経営組織に加わる事はなく、経営主体は変わらなかった。率分収入の減少は、確かに国人層によるもので、それは、田端氏の述べておられる通りである。

(59) 『大日本史料』八編ノ二 文明二年（一四八〇）九月一日条。

(60) 『大乗院寺社雜事記』文明一〇年（一四七八）正月一日条。

(61) 『山科家礼記』では、文明の頃の率分関はおよそ毎月一貫から多くとも三貫程、年間で千足程度である。

(62) 『東寺百合文書』ち函「廿一口方評定引付」文明二年庚子九月朝日『大日本史料』八編之二 文明二年九月一日条。これによると、東寺寺領内八条大宮に関所を設置した事に対して、東寺が異議を申し立てている。

(63) 『大乗院寺社雜事記』文明二年（一四八〇）九月一日条。

(64) 御厨子所西七条口率分は、柿屋という人物が代官の時は、米穀を率分役徴収の対象から外していた。その後刑部律師禪澄が代官の時に土一揆によってこの関は破られ、また同所に内蔵寮も率分所設置していたがこれも地下によって既に停廃されている。これは、米穀からも率分役を徴収した為である。米穀から徴収することは地下人の難儀であるので、一旦は押さえ取つてもいざれば嗽訴に及ぶであろう、という地下人の証言を採用して、武家の下知に関わらず、米穀を対象から外す事とした、という記載が有る『建内記』文安四年二月二日条。

(65) 御厨子所東国口率分の制札を書き改めることを万里小路家が近江国守護六角持綱に申請した際、その理由は、「物念之故」としているのも、地下の率分関への抵抗の大きいことを恐れたものと理解できよう『建内記』嘉吉三年二月一日条。

(66) 『山科家礼記』文明二年（一四八〇）一〇月一日条に、禁裏修理料関の停廃を求め一揆の、内蔵寮率分関への波及を恐れるために、四宮川原関を予め開放しておくという措置がとられた事を示す記事がある。この場合、関を「あけ」という表現が出てくるが、これは「上」げるとも

書かれ、関を開放することを意味する。例えば、『山科家礼記』文明九年（一四七七）二月二〇日条で停庵を命じられた神無森関が、翌日条では「被<sub>レ</sub>上」ている。

(67) 註(1)所引、下坂守氏論文一三頁。氏の説は、集落の存在から七口が固定していたのではないか、という実態からの説だが、私は、それは勿論のことだが、その実態を離れて、観念的にも「七」という数への本所・幕府双方の強いこだわりがあったと考える。

(68) 註(9)所引、佐藤和広氏論文。

(69) 『山科家礼記』文明九年（一四七七）二月一七日条。

(70) これらの外、「内侍所燈料関」『山科家礼記』文明九年閏正月九日条等も見られる。

(71) 『建内記』同日条。

(72) 『同右』同日条。

(73) 『同右』十一月三〇日条。尚、鞍馬口商人に対しては、応仁二年（四六八）二月二日付で万雄公事免除の院宣が、文明二年（一四七〇）二月一二日付で諸関の煩い無き勘過を命ずる室町幕府奉行人奉書が、それぞれ出されている（『華頂要略』三四 門下伝 院家一『大日本史料』第八編之二）。

(74) 『山科家礼記』文明十三年（一四八一）正月六日条他。

(75) 『同右』文明一八年（一四八六）七月六日条他。

(76) 『同右』文明二年（一四八〇）九月二四日条他。

(77) 『同右』文明三年（一四七一）一月一三日条他。

(78) 奥野高広『皇室御経済史の研究』第二章 室町時代の皇室御領

(79) 本稿では、『図書寮叢刊 壬生家文書』（宮内庁書陵部）を利用した。以下、『壬生家文書』と略す。文書番号も本史料集のものとする。

(80) 『壬生家文書』六八六号文書 文和四年（一三五二）三月二六日付後光厳天皇綸旨案。

(81) 『同右』七一一号文書。

(82) 室町幕府から度々小野山供御人に対し「忠節」を求める下知状が出されている。例えば次の室町幕府將軍家足利義満御教書案の如きである。

（山名氏清・満幸）

凶徒退治時分、長坂越事令（警固）可<sub>レ</sub>致忠節之状、依<sub>レ</sub>仰執達如<sub>レ</sub>件、

明德二年三月

（細川頼元）  
右京大夫 在判

小野庄沙汰人等中

（『壬生家文書』七〇三号文書）

他に、六九五・六九六・七一二号文書も同様の事が読み取れる。

(83) 相田二郎「中世の兵士及び兵士米」『歴史地理』四七ノ一 一九二六年七月、同「兵士米と警固役」『歴史地理』五〇ノ四 一九二八年四月。共に同「中世の関所」所収。

(84) 奥野氏は、内蔵寮や御厨子所の長坂口率分関に対して、小野山供御人の長坂口兵士米関は、同じ丹波街道の長坂口ではなく、小野山にあったものであると述べられている（奥野高広『皇室御経済史の研究』三五六頁）。

しかし、長坂口を狭い地点と捉えずに、長坂越一帯が、丹波或いは若狭方面からの京都への入口として認識されていたと考えれば、二ヶ所の長坂口を想定する必要はない。

(85) 元弘三年（一三三三）には存在しない。（奥野高広『皇室御経済史の研究』三五六頁。）

(86) 同右、長坂口の項、二五六・七頁。しかし、残念ながら、「勝仁親王関」の典拠は解らなかった。

(87) 主殿寮側の史料によると、南北朝時代の文和四年（一三五二）から註(80)所引 応永年間を通して、嘉吉元年（一四四一）一月一九日までは、永続して存在していた事が確認できる（『壬生家文書』三 主殿寮領雑々文書一・二）。この時期、御厨子所率分関は、嘉吉元年八月三〇日、文安元年（一四四四）二月七日、同年四月七日（各々『建内記』同日条）に確認できる。

また、内蔵寮の関は、応永十三年（一四〇六）二月二九日、応永一十六年



(一四〇九) 関三月一日(各々『教言卿記』同日条)等において確認できる。  
(但し、以上は設置時期が重なった記事のみ抽出。)

(88) 『大覚寺文書 上巻』(一九八〇年九月 大覚寺)「井関家文書」二  
大覚寺領関係文書(5)及び(7)。

(89) 『建内記』文安元年(一四四四)二月七日・四月七日条。

(90) 『山科家礼記』文明二年(一四七〇)一月二十五日・二六・三〇日・一  
二月八日・十一日・一五日条。

(91) 『壬生家文書』八八一・八八二号文書。

(92) 『同右』八八三・八八九号文書。

(93) 『同右』八八五・八八六号文書。

(94) 永正一五年(二五一八)八月二十七日付下小野供御人等重支状案(壬生家  
文書)八八三号文書。(一)内註筆者。

(95) 長坂口紺灰座については、次の論文がある。沢井宏三「長坂口紺灰座  
商人に就いて」『歴史と地理』三一ノ五 一九三三年五月、飯倉晴武  
「永正一四年以降の長坂口紺灰座について」『国史談話会雑誌』七 一九  
六四年一月、脇田晴子『日本中世商業発達史の研究』第五章、第三節  
座頭職の売買・第四節 都市問屋の農村商工業支配。

(96) 註(2)所引鍛代敏雄氏論文。

(97) 京都周辺の関ではないが、文明の頃には近江国山中関の一方給主職は、  
完全に物權化している『親元日記別録』中「政所賦銘引付」文明六年(一  
四七四)閏五月一〇日条他。

(98) 註(18)参照。

(99) 中原俊章『中世公家と地下官人』第三 諸寮司・宮廷機構と地下官人、  
三 検非違使(一九八七年二月 吉川弘文館)

(100) 『建内記』文安四年(一四四七)三月二十八日条。